

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 イーヴリン・ウォー『回想のブライズヘッド』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

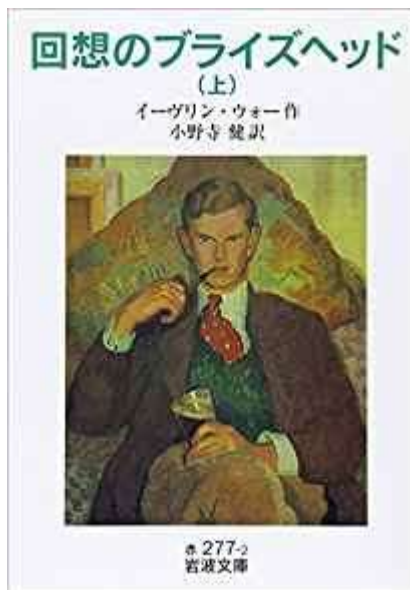
『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 44 回のツイキャス読書会の課題図書は、イーヴリン・ウォーの『回想のブライズヘッド』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

「回想のブライズヘッド」感想文

物語は王朝時代から資本主義へ進みつつある時代のカトリックの地主家族に起きた悲しいお話でした。次男のセバスチアンは子供のころに条件づけられたカトリックの教えと社会の変化による解放された環境と母を喜ばせない自分との間で苦しみアルコール依存症になり、父親と違ってカーラのような存在も持てず、結局廃人のような一生を送るようになってしまいました。

ジュリアンもチャールズとの結婚を断念してしまうし、コーデリアも自分の人生を気が付かずに犠牲にしています。

また、母親のマーチメイン夫人は夫や子供たちの行動が自分に原因があることに気が付いていないので悲劇は終わりません。夫人も没落する家の盾となっている可哀想な運命の人でした。

時代が少し前だったら悲劇はなかったかもしれないと思いました。

日本人は仏教を信じている人が多いと思いますが、厳しい戒律もないから自由も許され幸せだと思いました。日本は島国で沖縄を除けば外国の紛争に巻き込まれたり植民地にされたりという経験もなく来れた歴史が宗教に深く頼らなくても生きていけるのではないかと思います。

私は毎日仏壇に手を合わせてはいますが、それは神というより、ご先祖様へという感じです。

私は没落による悲しみは実感できませんでしたが、セバスチアンが言った「生まれてからずっと他人に世話をしてもらってばかりの者が、誰か他人の世話をできるようになるというのは嬉しいものだよ。」(下) P136の言葉にはとても共感しました。

人はお金だけでなく、自分が必要とされないと生きていけないと思います。ここを読んだ時涙が出ました。

最後に、気になるけど意味がよく分からない所がありましたので、読書会で教えて頂けたらと思います。

- ① 下) p 45 「わたしは自分の一部をここへ置いていく」の自分の一部とは、セバスチアンをさすのでしょうか？
- ② 下) p 136 (もっと気をつけて聞いていたらわたしの持っていない鍵を与えてくれたはずだったのである)

この鍵というのは、セバスチアンを助け出す鍵、つまり、セバスチアンが他人のために役立っていることを自覚させる働きをしてあげるという意味でしょうか？

宮澤さん宜しくお願い致します。

(おわり)

『回想のブライズヘッド』感想文

セバスチアンは、すごく孤独な印象を受けました。

母親に愛されていないくて、強く愛されたいという気持ちがしました。

自分の家なのに自分だけが別世界に居るようなそんな気がしていたのかなと思いました。

熊のアロシマスはセバスチアンがチャールズの部屋の中に嘔吐した時、許していただけるまで口をきかないと言っていて面白かったし、アロシマスはセバスチアンにとって大切な存在なのかなと思いました。

少し変だけど、セバスチアンは愛すべき存在だなと思いました。

でも、セバスチアンがアルコール依存症になってしまった時、アロシマスは叱ってはくれなかったのかな？それはチャールズが自分とだけ仲良くしてくれていたら良かったのに、嫌いな家族との関係が出来てきて、閉め出された気持ちがしてたとえアロシマスが不機嫌になっても止められなかったのかな？ と思いました。

まだ全部読めていなくてよく分からないですが、セバスチアンもチャールズも二人で一緒に過ごした時が一番幸せだったのかなと思いました。

気になるのが、セバスチアンとアロシマスがどうなったのかという事です。

セバスチアンは、自分なりの幸せを見つける事が出来たのかな？ と思うし見つけて欲しいと思いました。

(おわり)

『回想のブライズヘッド』 読書感想文

「神よわたしをいい人間にしてください、しかしまだしないでください」

この台詞が印象に残りました。

「あの子に何ひとつ幸せな感じがなかった」母親として、子を心配する。普通の事ですが、マーチメイン夫人は無意識、無自覚に子をコントロールしようとしています。薄々ですが、チャールズは夫人もどこかで気がついていて感じています。夫人は息子のために一晩中考えて祈り続けますが、それが重荷になっているセバスチアンは夫人から逃げ出し飲酒します。そして「恥じ入っているからこそ、次々に間違っただけをしでかす」となり、「彼は不幸なのを恥じている」となり、またマーチメイン夫人が心配する、堂々巡り状態だと思いました。

カトリックを信仰している人は他の人たちとは違う問題を重視してそれを隠そうとする。でもどうしても出ちゃう、それがやりきれない。問題の内容はわかりませんが、どうしても出ちゃうというのが厭らしい感じがしました。

わたしには、成人したひとり息子がおります。鑑みて、自分にもマーチメイン夫人に負けずとも劣らない信仰と同質な思い込みがあり、あくまで相手を尊重している体で、自分の思い通りにしていたと、再認識しました。正確には一生そうなんだとおもいます。隠しているつもりですが、これからはそれが、チラチラ厭らしく出ないように気をつけたいです。

「赤と黒」のジュリアン・ソレル然りセバスチアン・フライト然り多分私自身もなんらかの「愛情」を常に更新して確かめているうち、更新の間隔が狭まって破滅するか、間隔が広がって安定するかどっちかなのかなと思いました。

169 ページの、「ママはパパを憎ませないように説明→憎まなかったのはセバスチアンだけ→ママはセバスチアンにも憎ませたかった」というくだりがなんだか、怖い！

(おわり)

『 神は正しき者ではなく 罪ある者を悔い改めるために 』

これから挙式しようとする日本女性が、まず考えることは何か？

おおかた「神前式と教会式とどっちにしよう！？」だろう。信仰する宗教がある女性は別だが、大体が「白無垢とドレスはどっちがいいかなあ？」という意識だ。「どっちも着たいから披露宴と分けて、両方着ちゃおう！」で、一件落着だ。ここまで、神は微塵も存在しない。多神教である日本の宗教観が大いに関係しているのだが、この小説の舞台である一神教の英国では、そう簡単な問題ではないのだ。

英国貴族のマーチメイン侯爵は、妻と結婚する為にカトリックに改宗する。敬虔なカトリック教徒であるマーチメイン夫人の影響は、家族にとって多大だ。それは、子供たちひとりひとりの信仰心の深さも違い、セバスチャンのように家に寄り付かなくなったり、ジュリアの結婚相手の離婚歴にも関係する。マーチメイン夫妻の別居も離婚できないこともあるだろう。信仰と結婚生活もしくは人生は深く繋がっている。

しかし、再会を果たした無宗教のチャールズとカトリック教徒であるジュリアは、恋に落ちてしまう。既婚者同士であるが、離婚を経て、人生を共にする約束をする。ところが、マーチメイン侯爵の死期が迫るに際し、お互いの価値観がぶつかり合ってしまう。

終油礼を行い、「静かに」旅立たせようとするジュリアに対し、役に立たないと切り捨てるチャールズ。どこまでも平行線だ。ただ、信仰心のない侯爵が死の間際に切った十字架で様相が変わる。侯爵が死を恐れているからこそ、神父に会わせたくなかったチャールズだったが、実際は神が寄り添うことで死への恐れを乗り越えようとしていた。最後に立ち会ったのを嫌がられた例がないという神父の「キリストは、正しい人ではなく罪ある人をくいあらためさせるために、おいでになるのです。」との言葉が重い。まさにそれぞれ罪を背負っているマーチメイン家の人々こそ、最後は神に見守られるのだろう。

結局、信仰心の相違から、別れを選択するチャールズとジュリア。

葬式の際に、初めて我が家の宗派がわかる家庭が多いという日本に生まれたが、人生と信仰の関わりに揺さぶられた小説だった。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

「理解ある親」をもつ子はたまらない

以前、「理解ある親」をもつ子はたまらない」という、心理学者の河合隼雄さんのエッセイで読んだ。子供に理解あるふりをする親は、その子供が予想外の行動をした時(例えば性犯罪など)「まったくわけがわからない」と言い訳するためだけにむしろ、理解のあるふりをしているというのである。成長段階で、誰かにぶつかなければ、子供は自己を確立できないそうだが、理解のある親は、暖簾に腕押しといった感じで巧妙に、子供を避ける。結果、ぶつかる対象を見失った子供は、突飛な行動で、親を困らせ、なおかつ、辛辣なかたちで、子供を突き放す。子供は理解あるふりをしてきた親をますます深く憎む。

セバスチャンの母、マーチメイン夫人は敬虔なカトリックであるが、彼女のキリスト教徒の関わり合い方こそが、セバスチャンのアルコール依存症の原因であるような気がした。

セバスチャンは、母を憎みながらも、実は自分の中にあるものを憎んでいると、セバスチャンの父の愛人カーラは解説した。

しかし、憎んでいるものがなんなのか？ カトリックが常に人間の良心を監視し、魂の服従を求めていることへの憎しみなのか？ あるいは、不幸を背負うことこそが、信仰の深さを試すのだという考えを、憎んでいるのか？ あるいは、キリスト教には、理解をもつ親のようなやらしさがあり、それを憎んでいるのではないか、などなど考えたが、わからない。

人生は長いので、青春の挫折を経て、なお生きていくとしたら、魂の問題は避けて通れない。そして、魂の問題をキリスト教の中で理解しようとすれば、どうしても自分の罪深さを自覚せざるをえない。

以前、リリー・フランキーさんが等身大の少女の人形を連れて、「[笑っていいとも!](#)」のテレホンショッキングに出演していた。会場のお客からは、歓声ではない種類の悲鳴が上がっていた。結局、それが、どういう意図か、最初よくわからなかったが、今思えば、理解あるふりをする世間への憎しみ、そして、自分自身への憎しみと、そして、愛の渇きとを感じる。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください http://bookclub.tokyo/?page_id=2343